

掲載された。その直前の「七月旦上堂」の語と共に、対応する元和刊行版第二巻で見られる。およそ宗教聖典は語録の形式を辿るが、禅語録の編集過程がよく判る珍しい事例である。編集後は提唱した師のメモは破棄されたのであろう。漢訳後のサンスクリット原典と同じ運命である。

先の二侍者はこのほかに名が残っていない。嘉暦元年成道の日の大徳寺開堂から記録されているから、二人の侍者は「旧参底」ということになり、関山和尚は大徳寺開創二年後の掛塔ということになる。実は南浦和尚逝去後十八年の開創で、聖胎長養二十年は足掛けということになる。関山和尚は二十年の約束を知悉していたので、敢えてそれを守られたと見られる。また道号にも印可状にも「慧玄」と宗峰和尚から書かれているのに、関山和尚は師の死後間もなくの語録編集時には、得度の師・南浦和尚から贈られた「惠眼」を使っておられるのは面白い。

ここには一夏(げ= session)三箇月近く、宗峰和尚が四月十四日から六月まで、師の南浦和尚が三十二年を過ごした筑前太宰府の横岳山崇福寺に大友氏の請いで住し、往復の旅程を含めて後醍醐天皇への百箇日の約束を果たした安堵が見られる。最初は七月一日の上堂語であり、件の資料(会場配布)が七月十五日の解夏の語である。筑前太宰府行はちょうど夏安居の期日にあたる。

「解夏小参。随处に主と作り、聖制を横岳山頭に結ぶ。立処皆真なり。賞勞を龍宝峰頂に解く。此の事を相謾せざる時、人に孤負せず。(中略)山僧に親切の一句子有り。各各分明。善く処処に忘却することを得ざるを為せ。便ち主丈を卓すること

一下す。」一句子とは「各々分明」である。

問題は関山和尚が印可受領後、美濃伊深郷に「間もなく」(荻須純道「日本中世禅宗史」三三八頁)隠れて聖胎長養の道を取ったと解釈されてきた事で、それでは語録編集の辻褄が合わない。また師の崇福寺住も、関山得度の師・南浦和尚の事蹟であるから、大徳寺看護にせよ随侍にせよ退山することなく師に協力したと見るのが自然である。いずれにしても印可状を受領してから数年は師に随侍しておられたと見るのが常識的である。延元二年(建武四年 一三三七)の師の示寂後まで七年間も隠遁していたという不自然な解釈は「正法山六祖伝」の記述に始まる。小稿「関山国師の新研究」(「禅学研究」第八十七号)を参照されたい。またパンフレット「大本山妙心禅寺開山関山国師略年譜」の版が京都・石田大成社にある。

鈴木大拙と仙厓——遊戲の視点から——

嶋本 浩子

鈴木大拙が、江戸時代の禅僧、仙厓義梵(一七五〇—一八三七)の書画と出会った時、大拙はすでに八〇歳を超えていた。仙厓は洒脱な人柄と書画の作風によって、その評価は風刺画、戯画、あるいは禅漫画とみなされていた。しかし、大拙最晩年の英文著作の一つである *Sengai the Zen Master* において、大拙は仙厓の書画は単なる戯画ではないと結論づける。「仙厓和尚は近來の大禅者である。また大芸術家である。禅者であったと言うことが、その芸術家たることを隠蔽してしまつて、その書画を「戯画」だとか戯筆だとか言うことにしてしまつ

た。(略) 何かも「禪」だ、また「戲」だ。」(『増補新版鈴木大拙全集』第三四巻、二二四頁) と、大拙は述べる。「戲」とは戯れることであるが、大乘仏教には深い意味がある。これを遊戯といい、心のままに無礙自在なことをあらわすことを意味する。禅では遊戯、神通遊戯、遊戯三昧の言葉が使われ、衆生済度のために、慈悲行を実践することを自ら楽しむ悟りの境界を現わす言葉である。遊戯は、『無門関』や『六祖壇経』にも見ることができる。

大拙の「戲」は、遊戯三昧を意味すると言えよう。「人間のため、世界のため、何か大慈大悲の仕事を行ずること」であり、「その行動は報いを求める行動ではない」と語り、そのうえで、遊戯を「創造の生涯」「詩の境界」(『増補新版鈴木大拙全集』第二十巻、岩波書店、二二六頁) と述べる。大拙独自の「戲」の解釈は、「創造の生涯」「詩の境界」と述べていることである。「創造の生涯」「詩の境界」は、人のあり方と芸術の二方面にあてはめることができると考えられる。なぜなら、大拙にとって遊戯三昧になって生きることが、「人間自身が美的作品となり、霊性的に出来上がった人間」(前掲書、二二六頁) になることだと述べているからである。これは、空からの絶対的な用きが身についた生き方だと考えられる。大拙の言葉を使えば、真空妙用が身についているとも言えよう。さらに、「創造の生涯」「詩の境界」を芸術面でみれば、大拙は、「指なら指、手なら手をあげたところの裏に、ひそんでいるものを、手を通して、指を通してみるところにある。(略) そこに妙が出てくる」(『東洋的な見方』『鈴木大拙全集』二二〇巻、二七二頁)

と述べる。大拙は、芸術はテクニックではない無心になって楽しむとおのずと妙が立ち現れると述べる。これもまた、空からの絶対的な用きである真空妙用の一つの現れと言えよう。

大拙が仙厓を大禪者、大芸術家と評した根拠は、上述の真空妙用のはたらきが、仙厓の人物とその書画に表れていることを感得したからだと考えられる。仙厓の書画を見るかぎり、その筆致は軽やかであり、無心でなければ描くことができないほどの柔和さがあり、ケレン味のない筆致である。仙厓の書画は、見る人だけがやりと笑うだけでなく、仙厓自身も描くことを楽しんでいたことが、容易に想像できる機知がある。さらに、仙厓の書画には嫌味がないのも特徴である。仙厓の書画が軽妙と言われ、同時に、このことが仙厓の書画が戯画と評価される所以である。しかし、大拙は、仙厓の書画の嫌味のない機知や軽妙さを見て、仙厓が遊戯三昧そのものの境地に至っていると感得した。さらに、仙厓の書画を、仙厓が禅者として得た高く深い人柄から、慈悲の心が遊戯三昧となって筆先から現れた軽妙さであると理解したと考えられる。すなわち、大拙は、仙厓とその書画に、真空妙用をみたのだ。「創造の生涯」「詩の境界」と述べた真意もここにあるだろう。

*Sengai the Zen Master* は、仙厓を世界に紹介する大きな契機となった。大拙は、仙厓の書画を仙厓の慈悲の心が遊戯三昧となり、軽妙な作風となってあらわれていると理解した。この理解を根本に、大拙は仙厓とその書画を英文で世界に紹介したと考えられる。